

「伝統の継承」

ヘブライ人への手紙 12章1～2節

聖学院大学 大学チャプレン・キリスト教センター副所長 菊地 順

今日の礼拝は、召天者記念礼拝として、すでに天に召された方々を覚えて礼拝が守られています。教会の暦では、毎年 11 月の最初の日曜日に、天に召された方々を覚えて礼拝を守ることになっています。それにちなんで、大学でも、それに近い日に、聖学院大学の関係者で天に召された方々を覚える特別の礼拝を守っています。聖学院大学は、今年で創立 24 周年を迎えましたが、この 24 年余りの歩みの中で少なからぬ人たちが天に召されました。今日は、その方々を覚えながら、礼拝を守りたいと思います。

とは言っても、今日ここにお集まりの皆さんの多くは、どういった方々が天に召されたか、お分かりにならないと思います。しかし、その中には、現役の学生として亡くなられた人たち、また卒業した後に若くして亡くなられた人たち、そしてまた現役の教員として亡くなられた先生方、また職員として亡くなられた方々、さらに退職後に亡くなられた先生方や職員の方々がおられます。実は、今年度も、現役の学生の方が一人亡くなられました。また、退職された先生方の中で、お二人の方が亡くなられました。英語を教えられた大井上先生と初代学長をされた金井信一郎先生です。また在校生や教職員の中で、愛するご家族を亡くされた方々も、少なからずおられます。

わたしたちの人生において、人の死というのは、避けて通ることにできない出来事です。そこには、身近な人の死から遠くの人死まで、さまざまな死があります。また長い闘病生活の後に訪れる死もあれば、突然訪れる死もあります。また、昨年東日本大震災における多くの方々の死のように、自然災害による死もあれば、戦争による人為的な死もあります。そして、自ら命を絶つという痛ましい死もあります。一つ一つの死に、その理由があり、その経緯があり、そこには一律に語ることはできない一つ一つの重さがあります。そして、この重さに遭遇するとき、わたしたちは誰しもが厳かな思いにさせられ、また同時に自らの人生を振り返る時を与えられるのではないのでしょうか。しかし、そこには、一人ひとりの死を覚えるだけでなく、その人とのつながり、そしてまた、残された者としての自分の使命といったことにも思いが及ぶのではないのでしょうか。今日は、そうした思いから、特に、今年の7月に 95 歳で亡くなられた聖学院大学の初代学長・金井信一郎先生について、少しお話をしたいと思います。

金井先生については、すでにこの全学礼拝でも触れられていますし、また金井先生をお送りする記念の会も、このチャプレンで持たれましたので、学生の皆さんの中にも、金井先生のことについて、すでにご存じの方たちもいるかと思えます。私は 21 年前の 9 月から、このキャンパスで仕事を始めましたが、その時、金井先生はすでに 74 歳でした。恰幅が良く、丸顔で、よく大声で笑う、非常に親しみやすい先生でした。この先生のこと、わたしが一番印象に残っていることは、礼拝の説教に非常に

熱心に取り組んでおられたということです。学長としてのいろいろな場面での講演やスピーチよりも、礼拝でのお話が非常に印象に残っています。いつもきちんと準備をし、熱心に語られました。金井先生は、クリスチャンでしたが、牧師ではありませんでした。しかし、いつも、牧師であるかのように、聖書の言葉そのものを熱心に語られていました。ある礼拝では、旧約聖書の詩篇から、「神はわが嗣業である」とのメッセージを語られましたが、わたしはその時受けた衝撃を今でも覚えています。神こそわが嗣業である、わが財産である、と語られたのです。神がわたしたちの財産であるというのは、初めちょっと奇異な感じがしましたが、しかし、考えてみれば、なるほど、神こそ最大の財産、嗣業ではないかと思わせられました。神こそ、すべてのものをわたしたちにお与えくださる方であるならば、わたしたちが持つべき財産で、神以上の財産は、確かにないのではないのでしょうか。そうした思い出が、金井先生のかもし出されていた暖かい雰囲気と共に、今でも鮮明に思い出されます。

しかし、今日、改めて皆さんに金井先生を紹介するに当たり、やはり触れなければならないことは、金井先生が残された、聖学院大学の精神とも言える言葉です。それは、今までも、多くの人たちが触れていますが、それはこういう言葉です。「本学の真の学長は主イエスです。私はその弟子、諸君は孫弟子です」という言葉です。金井先生は、初代学長として、聖学院大学の真の学長は主イエスであり、学長の私は主イエスの弟子である、だから学生諸君は、私から見れば、主イエスの孫弟子であると言われたのです。この言葉には、主イエスを頭とし、その頭である主イエスに弟子としてつらなる「つながり」が、端的に語られています。そして、その「つながり」こそが、聖学院大学を一貫して流れている水脈であり、伝統であると言ってもいいのではないかと思います。主イエスを頭とし、その主イエスに弟子としてつらなる精神によって貫かれているのが、聖学院大学なのです。

そのことを思いますと、金井先生が残された言葉は、聖学院大学の精神をよく表しているのみならず、その方向を指し示している言葉でもあると言えます。それは、初代学長として、大学の歩みを方向づけたとも言えます。わたしは、この事一つをとっても、金井先生は、初代学長として、その責任を十分に果たされた先生ではないかと思っています。

ところで、この弟子というのは、もう一つの点から見ても重要であると思います。それは、聖学院は、元々19世紀にアメリカで生まれたディサイプルスという教派に属しているからです。このディサイプルスというのは、英語で「弟子」という言葉です。キリストの弟子、それが聖学院が元々属していた教派の名前なのです。ですから、聖学院は、キリストの弟子を養成する学校であると言ってもいいのです。事実、聖学院の最初の学校は、教会の牧師を養成する神学校でした。そこから始まり、中学、高校、小学校、短大、大学、そして大学院へと拡大、発展してきたのです。確かに、キリスト者は、すべてキリストの弟子であるとも言えます。しかし、ディサイプルス派が特に弟子ということを強調した背景には、キリストの福音を述べ伝える、つまり伝道する、ということを重視したからでもあります。事実、アメリカのディサイプルス派は、日本を初めとして、海外に多くの宣教師を派遣しました。日本でも、そうした宣教師たちによって地盤が築かれ、その上に聖学院が建てられていったのです。そうした、キリストの弟子としての自覚が、聖学院の歴史を築いてきた精神なのです。ですから、金井先生が、「本学の真の学長は主イエスです。私はその弟子、諸君は孫弟子です」と言ったことは、そうした伝統を明確に表現することにもなったのです。

聖学院で学ばれている多くの人たちは、クリスチャンではありません。そういう意味では、みなさんをキリストの弟子と呼ぶことは適当ではないかも知れません。しかし、みなさんは、このキャンパスにおいて、キリストの福音に触れ、それによって養われているのもまた事実です。「神を仰ぎ、人に仕う」という精神によって育まれているこのキャンパスにあつて、神を見上げる精神と、人に配慮し、仕える生き方を、空気として吸われているのではないのでしょうか。わたしは、そう確信していますし、またそう祈っています。そうした校風に触れる中で、みなさんも、間接的ながら、キリストの弟子となっているとも言えるのではないかと思います。そして、それは、みなさん一人ひとりにとっても幸いなことではないかと思えます。というのも、そうした生きる指針が示されているということは、心強いことであるからです。2000年の歴史を生き延び、今も世界の3分の1の人たちが信じ、従っている生き方に倣うということは、迷いの多い若い時代において、生きる指針ともなり、生きる基準ともなる、大事な事柄であると思うからです。そうした伝統が、このキャンパスには脈打っているのです。

みなさんは、伝統と聞くと、どのようなイメージを持たれるでしょうか。世には、伝統校などという言い方があります。駅伝の伝統校、野球の伝統校、そういった言い方がされます。そして、しばしば伝統校の強みといったことが言われます。それは、長い伝統があれば、そこには様々な経験の蓄積と共に自信が備わっているからです。それは、たとえば言えば、大きな船のようなものではないでしょうか。伝統という大きな船です。そこでは、たとえ自分は小さくても、安心して乗っていられる船です。そして、目的地に向かって、自分を運んでくれる船でもあります。キリスト教も、実は、そうした巨大な船であるとも言えるのです。この船に乗ると、希望と喜びの人生を、おのずから生きることができるのです。自分で頑張る、頑張る、片意地張って生きなくても、この船に乗ると、どうしたら最も幸いに生きることができるか、また喜びに満ちた人生を送ることができるかが、分かるのです。そして、分かるだけではなく、そう生きることができるのです。そうした伝統の船の中に、この聖学院大学も生きているのです。

今日の聖書の箇所には、「このように、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれている」と語られています。このようにとは、旧約聖書で語られている、神に従って生きた人たちのことです。そうした人たちが、神と共に生きることの正しさの証人として、雲のようにわたしたちを取り巻いているのです。これは、力強い言葉ではないでしょうか。そして、この聖書の言葉が語られてからも、さらに2000年に渡って、それに続く証人がたくさん存在してきたのです。そして今、わたしたちは、そうした証人に囲まれて生きているのです。そういった巨大な伝統の中に生きているのです。そうであるならば、それを信じ、それを受け入れ、その同じ伝統の中で生きることは、決して無謀なことでも、でたらめなことでもなく、それどころか、安心して生きていける道なのです。この聖学院大学には、そうした伝統の重みがあるのです。そして、それは、この日々の生活を通して継承されており、その伝統の船に、みなさんも今、乗船しているのです。今日は、そのことを覚えていただければいいと思います。そして、そのことにもっと前向きに、意識して、取り組んでもらえたらと思います。金井先生が語られた、「本学の真の学長は主イエスです。私はその弟子、諸君は孫弟子です」という言葉を、是非かみしめてほしいと思うのです。そして、この伝統の中に生きている意味と意義を見出していただけたら幸いであると思います。